言わないと決めたこと

中　一

「全身麻酔の死亡率は、十万分の一なの。」そう母に聞かされて、俺は固まったことをはっきりと覚えている。

弟は、俺の三つ下で小学四年生。はっきり言って生意気で口が悪い。俺が、

「ちょっと、これ持ってって。」

と言おうものなら、

「は？何で俺がやらなきゃなんないの。自分で持っていけばいいじゃん。」

「ついでだろ。」

というやりとりは日常茶飯事である。俺も弟相手だとやっぱり口が悪くなるのだけど。

そんな弟が一ヵ月程前、入院することになった。睡眠時無呼吸症候群という病気らしく、扁桃腺とアデノイドという部分を切除する手術をするというものだった。それに対して俺は、「あいつは、一人で一週間も寝泊まりなんかできるの」と少し心配になった。弟自身も、やっぱり夜一人で過ごすことに不安を感じている様子だった。

そして、手術日が近づいてきたある夜、母が【全身麻酔に関する説明と同意書】という書類を読みながら、俺に話をしてきた。

「全身麻酔の死亡率は、十万分の一なの。そういうことも理解した上で手術を受けますということで、サインをしなくてはならないの。分かっていることだけどさ。いざ名前を書くとなるとさ……。」

「え……。」

こんなに身近に、こんなに急に降ってくるものなのか、死ってものが。俺が、今まで何度も言ってきた「死ね」っていう言葉。だけど、それって元気だし。本当の死とか意識していたわけじゃないし。俺は、何とも言えない感情におそわれた。

そして、手術当日。病院から帰ってきた母から、弟の話を聞いた。

「手術は無事成功したよ。でもあの子、集中治療室の中で、すっごく痛がって、声を出すのもやっとという感じなの。それなのにね、『兄ちゃんに会いたい』って言ってくれるの。」

え？　何で？　そりゃ毎日二人でゲームしたりし

ているけどさ。でも毎日けんかもしているしさ。

次の日、病院から帰ってきた母が、

「あの子に、明日、何か持ってきて欲しい物はあるって聞いたら、『兄ちゃん』って言うのよ。コロナの影響で連れて来られないって言っても、『会いたい、兄ちゃんといると楽しい』って言うの。だから、明日、テレビ電話してくれる？」

と言ってきた。テレビ電話は恥ずかしいけれど、とりあえず何を話そうか考えておいた。そして退院するまで毎晩、嬉しそうな弟と会話をした。

いつも当たり前のように側にいることが、突然、当たり前ではなくなることがあるのだ。「死ね」という言葉を使っていた自分を、今はとても恥ずかしく思う。無事退院した弟とは、相変わらずケンカもするし、お互いに口は悪い。でも、「死ね」って言葉は、もう二度と使わない。